緋色のレジェンディア

帆立レノン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
緋色のレジェンディア

【Ｎコード】
Ｎ６９３５Ｌ

【作者名】
帆立レノン

【あらすじ】
かつて世界は繁栄の絶頂にあった。魔法と科学その二つの融合「魔科学」と呼ばれ、その技術によって世界は未曾有の繁栄を向かえたのだ。だかある時突然滅んだ。神の裁きかそれとも自滅か解らぬまま終りを迎えた。
そして数千年後――ロストテクノロジーと化した「魔科学」その一端である「魔装具」と呼ばれるものが、古代遺跡から発掘される。魔力のある人にしか使えないが、その凄まじい力に人は再び虜にな

る。人は再び過ちを繰り返すのだろうか…

第一回緋色用語説明（前書き）

趣味で書きましたネタバレは無いと思います。

第一回緋色用語説明

第一回緋色用語説明
※台詞の頭にキャラ名が付きます。

グレン「はい。始まりました緋色用語説明〜」
リンファ「え……唐突に何よこのコーナー」
グレン「本編での専門用語を解説するコーナーだね」
リンファ「何よソレ……本来作者が説明するんじゃないの？」
グレン「ヘタレだからね」
リンファ「……こんなの書いてる余裕があったら本編進めなさいよ……」
グレン「まぁまぁ……さて第一回はリンファの職業『機械狩り（メタルハンター）』についてだよ」
リンファ「……仕方ないわね。説明してあげるわよ。簡単に言うと機械獣を倒す仕事ね。まずギルドに登録して免許を発行して貰うの。E級免許……D級免許と言った具合にね。最初に貰えるのはE級免許だけど魔装具を使える人は飛ばしてC級を貰える。功績に応じて階級が上がるわ。階級が上がるごとに受けれる依頼は増えるわ。ランクが高い程依頼はより高度に難しくなるわ。報酬も勿論高くなるけどね。ああちなみに登録出来るのは15歳以上からね」
グレン「リンファは何歳からこの仕事を？」
リンファ「15歳からよ。以前からも機械獣は倒してたけどね」
グレン「成る程……リンファの免許は？」
リンファ「アタシのはA級免許ね。殆どの依頼を受けれるわ。まぁ……アタシクラスになると名前と異名が名札代わりになるんだけどね。レイグはギルドマスターだからアタシの名前くらい知っていると思ってたんだけどね」

グレン「基本的に名前とか覚えない奴だからね」
リンファ「ちょっとだけショックだったわ」
グレン「でもそんなに有名だと名前を騙る奴も出て来るんじゃないか？」
リンファ「そう言う奴は馬鹿だからね。簡単に周りに吹聴するからすぐに掴める。そしてそんな馬鹿には制裁を加えているから……今ではアタシを騙るバカはまず居ないわね」
グレン「そりゃ恐い。じゃあ次の質問。ぶっちゃけ報酬は基本どれくらい？」
リンファ「本当にぶっちゃけたわね……知りたいなら教えてあげる。依頼に依るわ……Dクラスの機械獣を倒すだけで数十万クラス軽くいくわね」
グレン「まさに一攫千金だね」
リンファ「一般人ではEクラスを倒すのも難しいしね。一歩間違えば死ぬ訳だし……一般人の場合討伐するのに相当費用がかかるから割りに合わないわ」
グレン「確かに……」
リンファ「勿論Dクラス以上だと話しは別よ。数百万は当たり前ね。ただこのランクになると一般人では無理ね……一般人だと免許もC級が限界ね」
グレン「ふぅん……」
リンファ「Aクラスにもなると土地が買えるわ。全く……とんでも無い只働きをしたものね」
グレン「優しいんだねぇ～『魔弾のスカーレット』は」
リンファ「～～～！？　ち、違うわよ！？　別にアンタ達の為にやった訳じゃないわ！　機械獣は個人的に嫌いだから――」
グレン「はいはい。そう言う事にしておくよ」
リンファ「……釈然としないわ」
グレン「さて次の質問だけど……そもそもギルドって？」
リンファ「ギルドは王立管理の私設組織よ。元々は民衆が創立した

大規模な組織ね。私達『機械狩り』や各街の管理。自衛団の運営もしてるわ。民衆の願いを叶え、代償として寄付金を貰う。私達の報酬は民衆……みんなの善意のお金から来てるのよ」
グレン「成る程……」
リンファ「ちなみにC級免許からは定期的にお金が入るわ。そのお金もみんなから貰っていると考えると……ちょっと心苦しいわね」
グレン「リンファは何に使ってるの？」
リンファ「旅してるとあっと言う間に無くなっちゃうわよ。ホテル代。食費。武器の整備。機械獣の情報料。その他諸々。同行人も増えたしね」
グレン「でも数千万単位でしょ？　流石にそれくらいじゃ……」
リンファ「……ま、いつか話すわよ」
グレン「ネタバレか……そりゃよくないね。それじゃ次の質問だけど……」
リンファ「……何よ？」
グレン「あ～。それはまた次回だってよ」
リンファ「何よソレ……」
グレン「それじゃ……また……」
リンファ「ちょっと待ってアタシから忠告」
グレン「ん。何？」
リンファ「これを見て、『そんなに報酬良いなら機械狩りになろう』とか思ってる人も居るかも知れないけど……さっきも言ったけど下手をすれば一瞬で命を落とすわ。それほど危険な仕事よ。それにお金目当ての者はいずれ命を落とす。そう言う輩はアタシは何回も見て来た。生半可な覚悟は遠回りな自殺よ。命を落とす覚悟が無いなら『機械狩り』何て碌でもないのにはならない方がいいわよ」
グレン「……リンファ」
リンファ「アタシから以上よ」
グレン「……成る程ね……人の笑顔を機械獣から護る事……それが何よりの報酬か……」

リンファ「……？　何か言った？」
グレン「何でもない何でもない。それでは次回……お会いましょう」
「またやるの……？」
次回に続く……？

紅き理想郷

プロローグ「紅蓮の悪夢」

熱い……熱い熱い熱い熱い熱い熱いアツイアツイ…ひたすら熱くて紅いだけ…見えるのはただ赤！全身が……躯、身体、精神が溶けるように……熱い嫌だおかあさん嫌だおとうさん嫌だ嫌だ嫌だ熱いのはいやぁぁぁぁぁぁぁぁ――！

「……！」

一瞬で眼を覚ます。身体中に脂汗をかいている。久しぶりに嫌な夢を見たと少女は思う。

「シャワー…浴びよう…」

服を脱ぎ、自らの裸体を鏡で見る。背中は万遍無く、肩から二の腕まで残る醜い火傷の痕。

フラッシュバックされる夢の映像。

「――っ！？」

全身が炎に包まれような錯覚に見舞われる。思わず、コックを捻りシャワーを出す。

「はぁ、はぁ……！」

冷たい水が身体を冷やし、頭も冷えていく。

「最悪……」

（久しぶり見たからかな…本当に……）

同時に懐かしくもある悪夢。一瞬で地獄になった故郷。同時に失った家族を思い出してしまう。

「……」

余計な感情を捨て去る。自分はあの時、燃え尽きた。街も家族、躯も、精神も全て、焼かれ、燃やされ、焼き尽くされた。残ったのは燃えカスだけ。復讐と言う名の――

「……はっ」
自虐的に笑う。自分にはそれしか無い
少女の名はリンファ・スカーレット――復讐の魔弾。

第一話「竜殺の魔銃」

アルデ大陸南部にある街ウァルケ。中央大陸と比べ、自然豊かとは言えない荒れた地。とは言えこの街は意外と賑わう。オアシスがある為、ここを拠点とする商人も多い。また商人以外でも、ここの地には古代遺跡も多く点在しているためトレージャーハンターや時には国の調査団がこの街を利用する場合が多い。
「……」
そんな街にフードを深く被った少女が居た。表情はよく見えないが１６～１７歳辺りだろう。護身用か腰にはホルスターが吊り下げられている。
「……」
酒場の前に立つ。ギルドの看板もあり、どうやらギルド兼酒場のようだ。臆面も無く酒場に入る。
「……」
アルコールの強い臭いに少し顔をしかめる。
新たな来客に少し視線が集まる。気にせず会話を続ける者も居たし、興味深そうに見ている者も居た。
「…よぉお嬢ちゃん、俺達と遊ばねぇ？」
数人の男が彼女取り囲んだ。全員嫌らしい笑みを浮かべていて、明らかに悪酔いしている。少女は露骨に顔をしかめる。
酒場は基本的に情報収集や交換の場だ。もちろん、依頼の成功で有頂天となり意味も無く騒ぐ馬鹿もいるが、その類なのだろう。
「……」
無視して、通り抜けようとすると、
「おぃ！無視はねぇだろ――ひげぃ？！」

そう男がそう言って肩を掴まれそうになった瞬間、少女は行動を起こしいた。
「……」
「――――？！」
少女は男の鼻先に銃口を突き付けていた。
その銃は護身用などでは無かった。
回転式のリボルバー８２型クレト。無骨なデザインのそれは威力がかなり高いお化け銃。その分重量や反動もひどい。大の男でも両手を使い扱う程重い。少女が、しかも片手で扱える代物ではない。撃鉄も起こされ、既に引き金に指が掛かっていて、いつでも男の鼻先が跡形も無く吹き飛ばせる。
「――ひぃ！」
当然、一瞬で酔いも覚め思わず尻餅をつく男。少女はそんな男には一瞥もくれる事も無く、カウンターに向かう。
「……注文は？」
アルコール度数の低い果実酒を注文する少女。運んで来た店主に問う。
「……Ｃクラス以上の機械獣に関する仕事はある？」
淡々した感情の篭っていない声。少女には似つかわしくない声にぞくりとさせられる店主。だがそれ以上に。
「……何だって？」
聞かされた内容に愕然とした。そう店主が聞き返すのも無理はない。
『機械獣』とは、遥か昔からこの世界に存在し、人類の脅威の事だ。ロストテクノロジーである魔科学同様、謎に包まれた存在だ。
機械獣にはランク付けされており、Ｓに近付く程、脅威のレベルは増す。Ｂランククラスのモノは一体で街一つを滅ぼす程だ。Ｓランクに至っては伝説上の存在である。ランクが低かろうと機械獣が脅威である事には変わりない。
そんな機械獣に対し、少女は挑むと言うのだ。しかもランクの高

い機械獣に。
「正気か？お嬢さん？悪い事は言わん。やめときな……」
「そのお嬢さんって言うの……やめてくれない？」
彼女が初めて感情が込められ声を発した。鈴のようで凛とした声。同時にフードを脱ぐ。その顔と表情が露となる。端正で整った顔立ちだが僅かに幼さが残る。美しい金髪は一つに纏められ、一見すると貴族の令嬢にも見える。だが、そんな雰囲気を感じさせないのが、その眼だ。その鋭い瞳は、ただ一つの感情を映している。
憎悪。憎しみ。紛れも無い復讐者のそれ。ただただそれだけだった。どんな生き方をすればその歳でそんな瞳になるのだろうか。店主は思わず圧倒されてしまった。
「アタシにはリンファ・スカーレットって名前があるの」
「スカーレット……」
どこかで聞いた名だと、首を傾げる。
「まぁ、確かに最初はそんな反応ね……いいわ。見せてあげる」
そう言って彼女は、もう一つのホルスターから、何か鉄の棒切れのようなモノを取り出す。複雑の紋章が刻まれ、純度の高い魔力を感じる。
「……起動……ジークフリード！」
「……！」
彼女がそんな言葉を呟いた直後、ただの棒切れに見えるそれが変化する。紅い光りに包まれ、棒切れは銃に姿を変えていた。美しいデザインに、銃伸に紅い刀身がついている。それが二丁少女の手に握られていた。
「……！驚いた……まさか『魔装使い』だったとは！」
『魔装使い』。古代文明のロストテクノロジーであり、最強とも言って過言では無い『魔装具』を扱える唯一の存在。同時に機械獣に対抗できる存在でもある。
そこでようやく、少女の正体に気付く。
「まさか。アンタあの機械獣狩り『魔弾のスカーレット』なのか！

？」
「ふぅん……そんな風に呼ばれてるんだ」
リンファ・スカーレット。機械獣狩り専門で、Ｃクラスの機械獣をたった一人で倒したという逸話を持つ。銃型の魔装使いで、付いた二つ名が「魔弾のスカーレット」。女性と言う噂もあったが、
（まさかこんな女の子だとは……）
魔弾のスカーレットが少女だったのは驚愕だ。だがそれ以上に驚愕すべきは、その若すぎる歳。そんな歳で既に、魔装使いとして完成している。本当にどんな生き方をすればこんな少女が生まれしまうのか。様々な人間を見てきた店主は、戦慄を覚えずにいれない。
「もういい？」
「あ？……ああ…わかった十分だ……」
「武器モード解除…」
そう彼女が命じると魔銃は元の姿に戻る。それを再びホルスターに仕舞う。
「しかし、Ｃクラス以上の機械獣か……ちょいと待ってな」
店主は奥の棚にある仕事書類を漁る。
（まぁ……お嬢さんを疑う訳じゃないが……）
「Ｃクラス以上の機械獣討伐依頼は今のところない」
「……そう」
少し落胆したように、踵を返そうとする。
「ああ、待った！こんなのはどうだ！」
「ファング討伐？なによ、Ｆクラスの雑魚じゃない。こんなの相手にしてないわ」
「いやいや。これがラサカの村付近で大量発生してるんだよ。それで自警団も手を焼いてるって話だ。まぁ、報酬は確かに少ないがな」
確かにファングは単体だと、一般人でも倒せる程弱い。だが、群れともなると話は変わってくる。集団戦におけるファングは、頭が良い。それに数の暴力とは時に、一流の魔装使いも凌駕する。
自警団と言っても、魔装使いなど居ないだろう。苦戦するのは当

然だ。
「……」
少し考える。そして、
「いいわ。引き受ける」
「だが、自警団の話だとかなりの量らしいぞ？」
「ファングなんて相手にもならないけど……確かに多いのは面倒ね……」
「なら、俺が手伝おうか？」
いきなり、聞き慣れない声が背後から聞こえてきた。リンファは振り向く。そこに居たのは、リンファとあまり歳が変わらないように見える左眼に眼帯を付けた男だった。
「！？」
「……グレンか…何の用だ？」
店主はあまり驚いた様子はない。だがリンファは内心驚く。
（気配を感じなかった？この私が？）
そんなリンファの心中を知らず、グレンと呼ばれた童顔で黒髪の男は、人懐っこい笑顔を浮かべていて飄々とした印象を受ける。
だが、同じ魔装使いとして解る。その身に纏う魔力は凄まじいし、何より洗練されていた。幾場の戦場を駆け抜けなければ、そこまでは到達できない。
「いやぁ～今日はツケを払いに来たんだけどね。でも可愛い女の子のピンチとあらば、放っとけないんだよね～」
「嘘をつくな、てめぇ！いいからツケ返しやがれ！いくら貯まってると思ってやがる！」
「おいおい…男が細かいところ気にしちゃ駄目だよ」
「盛り上がってるとこ悪いけど……」
口を挟むリンファ。
「アタシは誰とも組まないわ」
はっきりとした拒絶。その拒絶には何かの感情が込められていた。いくら腕が立とうと彼女には、誰かと組む何て考えられなかった。

「つれないねぇ。男がこうも誘ってるのに」
そんなリンファの態度など歯牙にもかけず、飄々とした雰囲気は崩さない。
「子供に誘われても嬉しくない……」
「手厳しいね。でも俺こう見えて２５歳だよ。君のほうが子供だよ。ここと か」
グレンの手いつの間にかリンファの控え目な胸に伸びていた。
「はぇ？」
余りに予想外の行動にリンファの思考一度停止する。そして、数秒後ようやく自分のされている事に気づく。
「な、な……なぁ～～！？？？」
「ふむふむ……小さいけど形はなかなか…」
「こ……このヘンタイがぁ！！」
羞恥と地味に、少し、いや実はかなり気にしているコンプレックスを突かれ、爆発する。今までのクールな雰囲気が全て吹き飛ぶ、
「ぐげぇ！」
リンファの回し蹴りが綺麗な角度で決まり、奇妙な声をあげるグレン。
「絶対アンタみたいなのとは組まないわ！今度アタシの前に現れたら眉間に銃弾をぶち込むからね！」
そう激昂しながら踵を返す。かなりのスピードでリンファは酒場から出ていった。
「やれやれ……おい無事かグレン？」
「いやぁ……手痛いの喰らっちゃったねぇ」
何事もなかったように立ち上がるグレン。
「ったく自業自得だ。阿呆……それでお前はどう思った」
「どうって？」
あくまでもすっとぼけるグレンに対し店主は問う。
「あれは、化け物だよ。全く、お前と初めて会った時の事を思い出したぜ」

感覚までそっくりだ。と店主は付け加える。

『何だお前？殺すぞ……』

数年前の出来事を思い出す。

傷だらけの少年。こちらが攻撃すればそれだけで、死んでしまいそうな程の大怪我。

だが、それでも闘志は鋭く、暗殺者のような冷たい殺気を身に纏っていた。

とんでもない意思の強さ。しかし、壊れそうな程同時に危うくもあった。

「酷いな。こんな美少年を捕まえて化け物なんて」

その頃の雰囲気を微塵も感じさせない、身をくねらせながらふざけた事を言うグレンに店主はキレかける。

数年後、再会した時には既に今のグレンになっていた。

一体コイツにどう言った心境の変化があったのか？

「テメェ……終いには殴るぞ」

「俺が思った事は…彼女は怒った顔も可愛いって事だ」

「あ？」

口調は相変わらずだったが、グレンは真剣な表情だった。

「だから笑えばもっと可愛いだろうなってね……だから彼女と俺は違うよ」

さて…と呟き酒場後にしようとするグレン。

「ふん……」

それを見送る店主。行き先など聞かずとも分かる。

（確かに……な）

あの時グレンのセクハラを受けた彼女は確かに年相応の少女だった。無邪気に怒ったり、笑顔でいる方が彼女に良く似合っていた。

「……さて」

近日届いた、依頼書を見る。

『Bクラス機械獣の目撃者増加に伴い調査を…』

「やれやれ……忙しくなるな……」
災悪の足音が聞こえてくるようだった。

第二話「紅蓮の双剣」

第二話「紅蓮の双剣」

「アンタ！いつまで着いてくる気よ！？」

リンファは町を出ても着いてくるグレンに叫ぶように問う。ちなみに前回会った時の宣言通り、リンファはグレンの眉間に銃弾（紛れも無い実弾）をぶち込もうとしたが、軽々避けられてしまった。

（コイツ何者よ？一体！）

銃弾を避けるくらいの機械獣ならごろごろいるが、人間では同じ魔装使いでもかなりの実力が必要だろう。

「いやぁ～俺の名前はグレンだよ？アンタなんて他人みたいな言い方やめなよ。俺とリンファの仲じゃないか」

鳥肌の立つようなグレンの台詞に再びリンファがキレる。

「うっさい！アンタみたいな奇人変人に関わりたくなんてなかったわよ！後軽々しくリンファって呼ぶな！」

「俺の事はグレンって呼んでもいいんだぜ？」

「死んでも嫌！むしろアンタが死になさい！」

とか何とか口喧嘩しているといつの間にか目的地のラサカの村に着いた。

荒れた土地の割りには作物が育つのか畑が広がっていた。

「長閑な村ね……」

「ああ。ラサカは『モイ』の量産地なんだ。市場で出回る『モイ』の８割はここで作ってるんだ」

「ふぅん。蒸かして食べると美味しいのよね……アレ」

話をしながら歩いていると、大きな木造の建物が見えた。集会場のようだ。

「おっ。グレンじゃねぇか！何だ。お前が引き受けてくれたのか！」

集会場に入った二人を髭面の男が迎えた。身体は逞しく熟練され

た戦士ようだった。
「おっガレットか。正確には、こっちの……」
「スカーレットよ……依頼者は貴方？」
「お、おお！こりゃご丁寧にどうも……」
ガレットと呼ばれた人の良さそうな髭の男は、グレンを呼び寄せ、
『おい！こんな女の子を何処で引っかけてきやがった！』
『酒場で偶然いや、必然かな？俺とリンファは運命の出会いを果たしたのさ』
『かっ。相変わらずだなテメェは！そうやって口説いたのか。犯罪じゃねぇだろな』
『それどういう意味さ？それに違う違う。口説い訳じゃなく彼女の方から言い寄って……』
どかん。
銃声が響く。威嚇射撃でもなくグレンの頬を掠っていた。
「……あ～もしかして聞こえてた？」
ぎこちなく振り向く、グレン。そこには怒気を纏ったリンファが。
「ま・る・ぎ・こ・えよぉ――――！！」
遠慮容赦無く、クレトを放ちまくる。大口径の銃を連射連射連射。
「っと。そんなに、おっ。照れなきても、うわ！」
紙一重で全て避けられる。まるで何かコントのようだった。まぁ避ける方も撃つ方も必死なのだけど。
閑話休題。
「ま、何にせよ。グレンと魔装使いの女の子がいりゃ大丈夫だな……」
「えっ？」
とくに何の説明もしていないのにいきなりガレットはリンファの正体を見切ったのだ。
魔力を感じられない一般人は『魔装使い』かどうか判断がつかない筈なのだが……
「ガレットは昔、ファルセル王国の近衛騎士団の一人だったんだよ」

「うそっ！何でそんな人がこんな田舎に！」
リンファは驚く。ただ者ではないと思ってはいたが。ファルセル王国の騎士団の時点で驚くに値するのに、さらにその王国直属の騎士団なのだ。いくらリンファであろうと驚かずにはいられない。
「いやぁ……昔の話でさぁ。今じゃただ自警団の隊長ですぜ。お嬢ちゃんの方が圧倒的に強いと思いますぜ」
「でも……ファングくらいなら……」
「リンファ。ガレットはもう戦えないんだ」
「……あ」
よく見ると、ガレットの右足と、左腕は義手と義足だった。
「今じゃ新人の教育をやってまさぁ。いやこれが中々、天職ですわ」
豪快に笑うガレット。
「生き方なんて一つじゃねぇんですよ。旅して見てしみじみと感じたもんです」
その言葉はリンファの奥底にあるモノを深く抉った。
「……」
「それじゃガレット。そろそろ行ってくるよ」
「おぅ。気をつけろよ！お嬢ちゃんに怪我なんてさせんなよ！」

ガレットと別れ、村を出るリンファとグレン。
「あのガレットって人……」
「……ん？」
「騎士団って誇り高いんだよね……辞める事になって悔しくなかったのかな…」
「悔しかったに、決まってるだろ」
グレンは即答した。騎士にとって戦えなくなるのは、何にとっても苦痛だろう。国の為に戦えなくなる。忠義な高そうなガレットは誇りと生き甲斐を失ったのだ。
「一時期は自殺も考えてたんだよあのオッサンは」

「……」
ガレットにとっては生きる目標だったのだ。それが無くなってしまったらどうなるのか。
「でも、新しい生き方見つかったんだ。良い笑顔たったろ？ガレットは」
「……」
（アタシには出来ない……アタシはもうあの時……）
危うく、芽生えそうになる感情を摘み取る。自分にそんなモノは必要ないのだ。
「リンファ！」
「たがら気安く――」
そこでリンファも気付く。周囲から発せられる殺気に。
「囲まれたみたいだな」
「そうみたいね……」
恐れるに足らない。たかがFランクの機械獣だ。リンファはそう思っていた。
「リンファ！油断しちゃ駄目だ……」
「こんなの、油断してても倒せるわよ」
「リンファ！」
いつになく真剣な表情を浮かべているグレン。その表情はいつものへらへらした顔とは対象的な戦士のそれだった。
「わかったわよ……」
「うん……それでいい」
もうファングの姿は見えていた。狼を一回り大きくしたようなフォルムだが実際の狼より、強靭で速い。
「後ろ任せたよ！」
「え？ちょっと！」
リンファ制止を無視し、前にいるファングの群れに疾走する。
「……起動！フランベルジュ！！！」
いつの間にか握らていたリンファのより長い二本の棒切れが変化

する。朱くまるで、業火を具現したような波打った刀身を持つ剣だった。
グレンは、一番手近かに居たファングを切り裂いた。
「グガァ！」
直後、その体が燃え上がる。一瞬にして、ファングは炭と化した。魔双剣フランベルジュ。魔力を炎へと、変えるシンプルな魔装具。だがシンプル故に隙はない。
仲間をやられ、一瞬たじろぐファング達。だがそれも一瞬。次の瞬間には、グレンに飛び掛かる。グレンは冷静に、飛び掛かってくるファングを順番に切り伏せていく。一方の剣で敵を横に両断。返す手でもう一体を仕留める。そしてもう一方の剣は背後から襲おうとするファングを貫いた。
「グゴァ！！」
４体のファングが同時に飛び掛かってくる。
「炎舞……」
剣が炎を纏う。そのまま剣を振るう。炎がファング達を包み、断末魔の悲鳴さえあげられず蒸発した。
「炎燕……」
通常の動物ならば、既に力量の差を見極め、本能に従い逃走するだろう。だが機械獣は違う。彼らの本能はただ人を殺戮する事だけだ。故に、ファング達は引かない。死ぬだけと分かっていても、だ。

「……あいつ、強いじゃない」
リンファは、グレンの戦いぶりを見て素直に感心した。二刀流で扱うにはあの剣は長すぎると思ったのだが、グレンは軽々と操りファングの群れを圧倒していた。
とは言っても、彼女が何もしていない訳ではない。両手には、魔銃ジークフリードが握られていた。無造作に放たれような弾丸は、しかし正確に急所を撃ち抜いていた。機械獣の弱点は必ずしも頭部は限らない。頭を失っても、稼動し続ける機械獣も実際にいた。だ

が彼女は、今見えているファングの弱点が全て見えていた。
（見えている…というより感覚の方が強いけど）
もちろん、見えていたとしてもそこを撃たねば意味はない。だが彼女は狙いは外さない。魔銃ジークフリードの弾丸は魔力で構成されている為、威力を調整できる上、反動もぶれもないし重力の影響も受けない。故に狙ったところに確実に飛んでいく。さらに、彼女は視力も卓越している。魔力で強化もされているので、1キロ先のモノ容易に見据える。
超視力と、彼女の腕前と、魔銃ジークフリードの性能。それが彼女を「魔弾のスカーレット」とたらしめる由縁。
（……）
リンファはファングを撃ち抜きながら考える。
（何で、あいつは…初めて会ったばかりの奴を信じられるの？）
この仕事柄、人と組んだ事がない訳ではない。だが、何度裏切られた。酷い時には、報酬を独り占めする為に殺されそうになった事すらある。
（……）
戦闘中だと言うのに昔の事を思い出す。
あの地獄の中助けてくれた人は居なかった。泣いても、叫んでも。自分一人で生きるしかない。他人は利用するものだ。その日少女は自分に言い聞かせた。
「……！？」
はっと正気に返るリンファは、目の前まで迫ったファングを撃つ。だが――顔の右半分は吹き飛び、機械が露出していたが、構わず特攻してくる。
（狙いがズレた！？くっ間に合わない！）
そう思った直後、
「ギギャァ――！」
「え？」
ファングは炎に包まれていた。唖然とするリンファ。

「何ぼーっとしてんだリンファ。まだ敵はいるぞ！」
助けられたと理解するのに時間がかかった。
「なっ！よ、余計なお世話よ！！あれぐらいなんとでも……」
「お礼は後でキスしてくれたら良いから、今はファングを倒そう」
「はぁ！？」
場違いなふざけた言葉に思わず赤面するリンファ。言い返す前に、グレンは戦闘に戻ってしまった。
「〜〜〜！！」
半ば八つ当たり気味にファングを撃つ。ふと、グレンの姿を見る。グレンの背後をとろうとするファングをリンファは撃ち抜いた。
「ナイスショット！後で俺にキスしていいよ！」
「うっさい！」
怒鳴りながらも、不思議と心地よさを感じていた。感じてはいけない筈だったのに……

全てのファングを片付け、グレンは
「終わりだな！よっし早速……！」
「するか！！」
「おふぅ……！」
蹴りが入った。良い角度で鳩尾に決まる。
「……ふん」
倒れ伏したグレンに踵を返すリンファ。
「少しは……信用してくれてもいいんじゃないか？」
ゆっくりと立ち上がりながら、問うグレン。憧憬のような響きのソレにリンファは無言。
「……」
「俺は君を裏切ったりしない」
「……」
確かにグレンとの共闘は心地よかったでも
それでも。

「……ふん」
それでもリンファは裏切られるのが怖かった。温かさが怖かった。
失うのが怖かった。
だったら最初から求めない方が良い。
「リンファ……」
「依頼達成よ。戻るわよ」
グレンを振り返る事もなく歩き出すリンファ。
応えられる筈は無い
だって。
あの頃笑っていたリンファはもう居ないのだから。

第三話「過ぎ去りし思い出」

第三話「過ぎ去りし想い出」

ファング退治を終え、リンファとグレンは、ダレットに報告した。お礼と報酬を貰い町へと戻る。最初の酒場に入る。そろそろ日が暮れる為か、かなり賑わっていた。

「おぅ。どうやら無事に終わったようだな」

「まぁ…肩慣らしくらいにはなったわ」

「……レイグ」

店主は実はそんな名前だったのかと少しリンファは驚く。

レイグと呼ばれた店主は少し表情が変わる。と言っても僅かに一ミリ程、眉をひそめただけだったが……

「……何を隠してる？」

何を隠してると言うんだとリンファは思う。

「はっ。お見通しって訳か……ったくテメェには嘘がつけねぇな…」

と一度、溜め息を付き、

「Aクラスの機械獣がこの街に迫ってきている」

リンファの頭に戦慄が走る。

「――っ！？Aクラス……！」

脳裏にフラッシュバックする悪夢。

燃える町――――たすけて

建物が燃えて――――しにたくな

人が燃えて溶けて――――だれか

黒こげなモノになって――――どうし

それでも死にたくなくて――――たすけてくれな

（――――！今だけは思い出すな！）

必死に感情を押し留める。吐き気の来る映像を無理やり止める。

「……」
そんなリンファの様子をグレンは苦い顔で見つめたいた。
他の客にも聞こえたのか、店内がざわつき始める。
「な、Ａクラスだと！？」
「聞き間違いじゃねぇのか！？」
店内が混乱に包まれる。
「……どうして黙ってたの？」
様々な感情を押し留めながらリンファはレイグに問う。
「……魔弾のスカーレットの実力が見たくてな……今から２４時間後、つまり明日この街に到着する。見かけは巨大な蟹と機械のような外見だそうだ。見立てだと……Ｂクラスだったが、偵察させて見たら、Ａクラスと判明した。さて、どうする？依頼はＡクラスの機械獣の討伐だ」
「……不可能よ……高く見積もって勝算５％程度…速やかにこの街から出ていくべきね」
そう答える時には、リンファの頭は冷えきっていた。冷静に戦力をそう判断した。
いやそもそも、対抗する事自体愚かなのだ。
再び、ざわつく。逃げの算段を立てている者も居る。当然だ。Ａクラス機械獣なんて人が倒せるレベルでは無いのだ。
「……いいのか？テメェ等……言われ放題だぞ？」
「……だが…」
「相手は…Ａランクだぜ！？」
「勝てる訳ねぇ！」
再び、レイグは溜め息をつく。そして、
「弱気になってんじゃねぇ！！それでも男か！？」
一喝。普段の冷めた態度からは考えられない程力が篭った声に、店内は静まる。
「いいか！よ―く聞け！！この街を守りたい思う馬鹿は武器を持て！！機械獣ごときに怖じけついた賢明な奴はいますぐ逃げろ！！テ

メェ等がテメェで決めろ！！」
再び、シーンとなる店内。そして、
「ざけんなっ！テメェなんぞに言われ無くても分かるわ！」
「Aクラスがなんぼのモンじゃあ――！」
「いよっしゃ～！やってやろうじゃねぇか！！」
「な、な…」
盛り上がる店内をよそに、リンファは一人驚愕していた。
「何考えてんのよアンタ達！？アンタ達はただの人間でしょ！？魔装使いなんていないでしょ！？」
「魔装使いじゃなくても剣は握れるぜ」
「だからっ！そんな問題じゃ！」
「……皆、覚悟を決めてる…」
グレンが静かに呟く。今まで見た事も無い真剣な表情で。
「皆で力を合わせれば街くらい守れるさ」
「……っ！？」
リンファの脳裏に映像が再びフラッシュバックする。
『僕達がこの街を守る！だから――』
テーブルを叩き、立ち上がる。
「……宿に帰る…勝手にすればいい……」
「リンファ！」
そのグレンの声が、記憶の人物と重なる。
『リンファ…』
「――っ！？気休くっ、アタシをリンファって呼ぶなぁ！！」
それは、怒りと言うより、悲痛な叫びだった。
そう叫びリンファは、酒場から消えた。
「……リンファ……」
呆然とするグレンにレイグは、
「……お前、これ以上アイツにリンファに関わらない方が良いぞ」
そんな警告をした。
「どうしてだ？」

「半端な覚悟で人と関わろうとするな。リンファは下手すればお前以上に地獄を抱えている。これ以上踏み込めば、彼女の抱える地獄に触れてしまえば、もう彼女とは離れられない。逃げる事は出来ないぞ。それでも――」

人に深く関わるとはそう言う事だ。自分の人生を棒に振ってでも。その覚悟はあるのか。

そうレイグは言いたいのだ。

「……分かってるさ。どっちが簡単で選らぶべきなのか誰だって分かる」

そう言い、レイグに背を向ける。

「何処に行く？」

「町を出るから荷物を纏めるんだよ。夜逃げって奴？」

「……」

「こっち楽で良いかなってね」

グレンはそう呟き酒場を後にした。

残されたレイグはため息を一つ。

「お前らしい選択だ」

そう呟いたレイグの顔には笑みが浮かんでいた。

「……馬鹿みたい……」

予め予約を入れていた宿屋の部屋でリンファは呟く。愛銃であるクレトの整備も終わらせる。

「……逃げたなら死ぬ事は無かった」

何故……あそこまでムキになってしまったのだろう。

備えつけのベットに寝転ぶ。安宿特有の固いベットの感触。それが今は何故かとても心地良い。

「……あ、れ…？」

眠い……何故だろうかとても眠い……

（そう言えば…最近ろくに寝てなかったっけ……）

魔装具には待機状態の時でも、使用者に様々な恩恵を与える。身体能力や新陳代謝の底上げもその中の一部だ。その為に数日間休むなく活動する事も可能だ。だが限界もある。肉体がオーバーヒートしている状態に近い。無理をしていた分、気が抜けた反動も大きいのだ。

（……寝てる…場合じゃ）

意識を保とうとするが、躯はシステムダウンを命じている。

リンファは深い眠りに引き込れていく。……

アタシの家は、裕福だった。とは言っても父が堅実家のため、贅沢な暮らしではなかった。でも、幸せだった。優しいお母さんに厳しいけど立派なお父さん。そして、お兄ちゃん。幸せ家族だった筈なのに……アタシの誕生日の日だった。

『本気で行くのか！？』

『ええ……この街で魔装具が使えるのは僕だけです』

『それは自警団の仕事ではないのか！』

父と兄の言い争いが聞こえてきた……今日はあたしの誕生日なのに…喧嘩なんてしないで！

『やぁリンファか……ごめんな……誕生日祝ってあげられなくて……』

なにいってるの？お兄ちゃん？今日はあたしの誕生日だから、どこにも行かないって……

『ごめんな……ほら早いけど誕生日プレゼント』

……うそつき！要らない要らない！こんなの要らないよ！！。

『帰ったら、もう一度誕生日を祝おう…』

違うの……プレゼント何て要らなかったの…ただあたしは、ずっと一緒に居て欲しくて…

『それじゃ行ってくるよ…必ずリンファと僕達がこの街は守る！だ

から』
『必ず戻ってこいよ！リンファを……悲しませるな』
そんなのいや！お兄ちゃん何て大っ嫌い！
『リンファ……ごめんな』
そう言って、あたしの頭を撫でる……そうされるのは大好きだったけど…この時は嬉しくなかった……
『僕はリンファを裏切ったりしないから……』
……そう言って、お兄ちゃんは家を出ていく。
あたしはそれを信じた。お兄ちゃんが帰ってきたら、謝らなくちゃ…
結局お兄ちゃんは帰って来なかった。……うそつき…
本当は大好きって言いたかったのに……

数日経った日――
『なんだと！機械獣が！？ではまさか！――――は！？』
『……残念ですがご子息は……自警団も遺体一つ無く……
…あと数時間後には恐らく…』
『……我らは逃げない！この街は我らの誇りだ！ノエルの仇を討つ！』
お父さん……どうしてお兄ちゃんと同じ眼をしているの？
それはお兄ちゃんがあたしに見せ最後の表情と一緒だった。
『リンファか……――――。リンファを連れて街を出ろ』
『私もこの街と貴方と果てるつもりです』
お母さん……
『リンファは生きて……』
『来たぞ！』
お母さんに連れられ外に出る。
外に出るとひたすら朱だった。朱赤緋赤赤朱赤朱赤アカアカあかあか。悲鳴叫び声喘ぎ声。地獄だった。
『おのれ！この化け物がぁ！！』

その直後、お父さんに火炎が降り注いできた。
『――――！！？』
余波が襲い掛かる。
ひィ……ぎっ！
体の中を溶かされるような熱がアタシを襲った。
『――りん――――！！！』
あたしを庇い、お母さんはあたしを抱く。嗅いだのは、何か肉の焼ける嫌な臭い。
おかあさ――――――！？？
意識を失う前に見たのは、緋色の空に浮かぶ、朱いの色のドラゴン。朱く、まがまがしいまで朱。鮮烈に頭に流れ込み、全身に激痛が走る。ひたすら熱かった。まるで地獄のように……あたしは意識を失った。
気付くとそこには何もなかった。大好きな家族も、街も家も、ただひたすら焦げた大地が広がっていただけだった。あたしどうして助かったのか……お兄ちゃんに貰ったロケットから蒼い光が発せられていた。
そして、庇ってくれたお母さん……涙は乾いて、出なかった。流せるもの何てなかった。
歩く
中心部は跡形も残らなかったけど、町の郊外は酷かった。
一瞬で跡形も無くなった中心部はある意味幸福だったのかも知れない。
地獄は終わってなかった。
歩く
赤く燃える町
「――――ぁ」
生きたまま意味不明の叫び声を上げながら、のたうちまわるヒトガタ
助けてと掠れ声を上げる焦げた奇妙な物体

コワレタように嗤うヒトカゲ
喘ぎ声は怨嗟に満ちていて
周りと比べると遥かにマシな少女は
アタシは何も出来なくて
それでも
死にたくなくて
助けてくれる人なんて
それでも
歩いた
そして、何も残らなかった……
残ったのは、何も出来なかった自分の無力さと、ただただ、ただ
ただ燃え上がるような復讐心だけだった。
それだけがアタシの存在のすべてだった。

第四話「信頼と絆と力」

第四話「信頼と絆と力」

「……ん…」

リンファが目を覚ます。随分寝ていた気がするが、

「まだ5時間程度しか経ってないか……」

時計を見て間違いと気づく、リンファに寝起き特有のぼぅとした様子はなく完全に覚醒している。

「……」

やる事は、決まっている。Aクラスの機械獣を討伐しに行く。誰の力何て要らない。自分一人で、この街を守る。自分はもうあの時泣く事しか出来なかった少女ではない。「魔弾のスカーレット」だ。外はまだ暗い。リンファにとって闇など障害でも何でもない。宿屋を出て、外へ向かう。

「……」

あのグレン辺りが居そうだったが、誰もいなかった。

ホッとした反面、何故だが落胆したような気持ちになった。

「……馬鹿馬鹿しい…」

自分はまだ誰かを求めているのだろうか……

1時間後。荒野の岩影に潜む。リンファの視力が機械獣の影を捉えた。

「…起動……ジークフリード『狙撃銃』モードに移行…」

変化する。二丁拳銃ではなく、狙撃銃―――スコープの付いた無骨なデザインのライフルのような外見へと姿を変えた。スコープを覗き、機械獣の姿を捉える。

見た感じで言えば、巨大な蟹に様々な兵装を付けたような外見だった。六本の脚一つ一つには様々な銃口のようなモノが取り付けら

れていた。甲羅のようなところには、三本の砲台が取り付けられていた。
（目標……１０３０メートル……距離…修正。風向き、風速共に問題無し。弾丸は、レーザー状…高威力で……発射！！）
引き金を引く。ジークフリードの銃口からレーザー状の弾丸が発射される。それは寸分違わず狙い通りに機械獣を貫く……筈だった。
ギィィ――ン！！
（――弾かれた！？）
何か、不可視の障壁に防がれたようにレーザーは霧散して消えた。
（バリア！？――――？！）
機械獣がこちらをぎょろりと見た。眼球など有るかなど怪しいが、雰囲気や気配で悟る。驚愕する暇などなかった。
慌て、スコープから目を離し、その場から、離れようとする。
「――――っ！？」
極細の青のレーザーが遥か遠くからリンファに飛んできた。避けきれず、リンファの肩を貫いた。
ジュウ！と肉の溶ける嫌な音。それを聞いた直後、
「――――っあぅ！！」
肩から全身に激痛が襲う。悲鳴を何とか堪える。
（急いでこの場から逃げないと――！？）
再びレーザーが飛んでくる。頭上を掠る。直撃していたら、顔半分の無いシュールな物体となっていただろう。
狙撃されている。こちらから狙撃した為、敵に位置が割れている。
（数キロ離れてるのに何て威力！！）
そして、何より精度も恐ろしい。初撃も避けなければ、確実に心臓に穴が開いていた。
「――くっ！」
ひとまず逃げるしかない。ライフル状態のジークフリードは重い荷物に過ぎない。

「武器モード解除！」
元に戻しホルスターに収める
レーザーが幾重も飛んでくる。一つ一つが地面を穿つ。その中をリンファはひたすら駆け抜ける。
「……はぁ…はぁ…」
ひたすら走った結果何とか、機械獣の視界から外れたようだ。
「……はぁ……くっ」
肩からは出血はしていない。レーザーが触れた部分は蒸発していたのだ。いずれ治癒するだろうが…この戦闘が終わるまでは無理だろう。魔装具で強化しているとはいえ、人間に過ぎない。
油断していたつもりは、毛頭ない。だが、傷一つつける事おろか、その躯に触れる事もなかった。
（計測するに……最低１００メートルの距離で、最高出力にて撃ち抜く）
そうすれば、バリアを崩せる。
だが――
「近付く事すら厳しいのに……その上、最大出力で放つ何て……」
時間的にも、精神的にも不可能に近い。だが―
「やる……しかない！」
直後、リンファは横に飛んだ。
さっきの数倍の太さのレーザーがすぐ横を過ぎた。どうやら追い付かれたらしい。狙撃では仕留められないと判断したのか、焦れたのか、どちらにせよリンファにはとっては好都合。
「ゆっくり考える暇もないみたいねっ」
蟹型の機械獣を見据える。
「起動！ジークフリードぉ！！」
リンファの手には慣れ親しんだ二丁拳銃が握られていた。
「喰らえっ！」
圧倒的なスピードで連射する。指先が霞んでいるようだった。二

丁拳銃モードの最大威力で発射する弾丸は、しかし機械獣に届かない。全て見えない障壁に防がれる。
機械獣の脚の銃口が全てリンファに向く。横に飛んでも避けられない。そう判断したリンファは、上へ飛翔する。
直後、大量の弾丸が発射された。一つ一つが機関銃となっているようだ。
空中で一回転。再び、連射。だが障壁は無情にリンファの弾丸を防ぐ。
「くっ！」
甲羅のレーザー砲が空中のリンファを向く。空中では、普通は身動きが取れない。空中で二段ジャンプなんて人間では出来ない。
「舐めるなぁ！」
だがリンファは、ジークフリードをあらぬ方向に放つ。
以前、説明したがジークフリードは威力を調整する他、反動をオフにする事が出来る。
オフにする事が出来るならオンにする事も出来るのだ。
ジークフリードの反動で、空中を舞う。
埒が明かぬと機械獣は判断したのか脚の機関銃が様々な方向を向く。
一斉掃射。
「避けられないなら！」
ジークフリードはひとまず仕舞う。そして、クレトを抜く。
機関銃口に向け、放つ。計六発。バリアには弾かれず、まるで吸い込まれるように、銃口を貫いた。暴発を起こし、機械獣の脚が崩れる。機関銃はあさっての方向に弾丸が発射される。
実際、バリアの類は実弾に脆い部分がある。魔力を弾く障壁には実弾が良く効くのだ。
（今だ！）
地面に着地し、
「起動！ジークフリード『裁きの光』最終フェイズに移行！」

ジークフリードに変化が起きる。二丁拳銃では無く、狙撃銃でもない。
白銀の美しい大剣となる。
「決める！」
ジークフリードの剣先に魔力が収束する。イケる。そう思った直後、
機械獣の甲羅の中央の砲台が動いた。
そして、轟音。
（――なっ！？）
極太のレーザーがリンファの数メートル先の地面を抉ったとリンファが感じた時、
「きゃあ！？」
途轍もない衝撃波が彼女を襲った。吹き飛ばされないようジークフリードを地面に突き刺す。
（何て……威力…！）
そう思った直後、
「……え？」
足場が崩れた。あまりの衝撃で地面が崩壊したのだ。
衝撃波でバランスを崩すされていたリンファは敢え無く、落下する。
（墜ちる？……ここ…までなの？）
（……死ぬ……まだ死ねないのに……）
（みんなの仇をとるまでは……死ねないのに）
（……死に…たく、ない！）
脳裏に浮かぶのは、家族の顔……死んでいった人達の。
（……あれ？）
衝撃は思いの外軽かった。
誰かに抱え上げられてる。その人物は崩れる岩を足掛かりに次々昇っていく。
「さて……我ながらナイスタイミング！」

地面に到着した時、その正体に気付く。
「あ……アンタは！」
「や。リンファ」
童顔で眼帯を付け、とぼけたような笑顔のグレンだった。
「な、なな何でアンタが！？」
「女の子のピンチにはすぐ駆け付ける。双剣のグレン。参～上！！」
とんでもなくダサい台詞を吐くグレン。レイグあたりが聞いていたら問答無用で殴っていただろう。
「何でアンタが…！！」
しかし、リンファに突っ込む余裕など無い。
「……俺の格好いい台詞は無視かい……」
そんなグレンにリンファは、
「アタシに助けなんて要らない！どうしてよ！何でアタシなんかに構うの！？アタシは一人でも大丈夫なんだから！一人で出来るから！一人で倒せるから！」
心の奥底にあったモノを吐き出すかのように叫ぶ。
他人なんて要らない。信頼なんて要らない。友達何て……要らない。裏切られた時…違う。失った時が悲し過ぎるから。
だから最初から求めなければいい。一人で居ればいい
「でも、俺が助けなきゃ君は死んでた」
「……アタシは…」
「一人で駄目なら二人で二人が四人で……他の人に助けを求めればいい……まぁ…偉そうに言ってるけど、俺も気付いたのは最近なんだけどね……」
「……」
「だから、俺は君を裏切ったりしない……勝手に居なくなったりしない！だから俺を信じてくれ」
真っ直ぐとリンファの瞳を見つめるグレン。リンファは目を逸らせなかった。
「……」

恐い。恐いけど温かい。懐かしい感情だ。まだ自分にそんな感情があったのか。
気づかない内にリンファは笑みを浮かべていた。
「……五分！」
「……ん？」
「いや……三分時間を稼いで、その間に決める！」
「……リンファ！」
「勘違いしないで！……別のアンタの事信用した訳じゃないんだからね！」
リンファは顔を真っ赤にして、そんな事を言った。その顔では説得力など皆無だが。思わずクスリと笑うグレン。
「な……！何がおかしいのよ！」
「何でもないって」
さて……と倒れている機械獣を見る。
ギギギっ……ギギギギギギ
嫌な音を立てながら立ち上がろうとしていた。先ほどの傷は驚くべき事に修復され、跡形も無かった。
「……動かないと思ったら修復していたのか……」
圧倒的、破壊力と防御力。さらに修復機能付き、全てAクラスだ。
「みたいね。いいわね！三分よ！！任せたわよ…グレン！」
「……！」
初めてリンファがグレンの名を呼んだ。
湧き上がる感情を抑えながらグレンは答える。
「任されたリンファ！何なら十分以上でも、大丈夫だぜ？」
「三分よ！」
そこはリンファのプライドなのだろう。それは譲らない。
「はいはい…じゃあ行くか！」
そう言ってグレンは風のように駆け出した。
「……頼むぜ！フランベルジュ！！」
蟹型の機械獣は機関銃を放つ。

「燃えろ！」
二対の魔剣で炎を造り出す。弾丸は全て蒸発する。
機械獣は、無駄と判断したのかレーザー砲を放つ。
グレンはそれを僅かな動きで避ける。
「でぁ！！」
フランベルジュで切り付ける。だが障壁に防がれる。機械獣はレーザーを射失しながら、砲台を動かす。さながら、光のブレード。その光のブレードをグレンは避け、時にはフランベルジュでガードする。
「炎舞！」
僅かに隙ができた一瞬。常人では一秒にも満たない刹那の時間
「炎王波！！」
両の剣を突き出す。炎が爆発した。この戦場で客観的に見る第三者が居たらフランベルジュが爆発したようにも見えただろう。それほどの爆撃。前方一定範囲なら消し炭と化す。
（どっちかと言うと俺の剣は対人向けなんだけど……）
機械獣向けに鍛えた技。炎舞・炎王波。紛れも無いない全力の一撃。
「だからと言って……倒せた自信はあったんだけどな……」
ギギギギギギギィーギギッギ
無傷ではないが……健在だ。おまけに修復も開始しているようだ。
「……頼んだよ…リンファ」
自分には時間稼ぎ出来ないようだ。
「いくぞ！」

「……」
不思議と心地がいい。　リンファは、口ではああ言ったがグレンの事を信頼していた。でなければ、機械獣を前にここまで安心してジークフリードに魔力をチャージできまい。
それだけでは無い。いつもより魔力が澄んだように洗練されてい

く。間違い無く今までで最高の出力だ。
ジークフリードが蒼白く光る。刻まれた古代言語が浮かび上がる。
それにリンファは気づかない。
（……こんなのアタシらしくないな……）
そう言ったリンファは微笑みを浮かべていた。魅力的な笑顔。本人は気付いていないし、言われても信じないだろう。リンファの感情は灰になんていなかった。
（……あと一分……）
もう既にリンファは勝ちを確信していた。機械獣を倒すまで勝ちを確信しない彼女にとって、それは珍しい事だった。

「凄い……な」
リンファに魔力が収束する。高密度の魔力。とんでもない魔力をリンファから感じる。
あの魔装具は普通のモノでは無い。
「神装」古代文明より更に以前。神の時代に人ならざる者によって製作された天使や神の為の武器。そんな御伽噺を思い起こさせる程の光景だった。
それを扱うリンファも恐ろしい。
「俺と同じ……いやそれ以上か……」
闘争心が疼く。目が細まり、魔力が高まる。
「……って…俺も人の事言えないな……」
グレンもまた、昔の事を完全に振り切った訳ではない。こういった無意識の所に現れてしまう。
「ここに居たら巻きこまれるな……」
大きく跳躍し機械獣から距離を取る。機械獣は追撃しようとするが、唐突に止まる。
機械獣も気づいたのだろう。リンファから溢れる魔力に。
「だが、もう遅い」
次の瞬間、極光が機械獣に襲いかかった。

「裁きの光！発射ぁ――！」
リンファのジークフリードの剣先から巨大なレーザーが放出された。それは、強固であった筈の不可視の障壁をあっさりと貫いた。まるで紙のようにあっさりと。そしてそのまま、
ギィ……ギギギギィ！
それが、蟹型のＡクラス機械獣の断末魔だった。
機械獣は跡形も残らず消滅していた。
最初から存在しなかったように。
「勝っ……た」
リンファの意識が薄れていく。魔力の使い過ぎらしい。誰に支えられる感触を最後にリンファの意識は途絶えた。

第五話「別れ道」

第五話「別れ道」

リンファは夢を見ていた。
小さい頃の夢。それは決まって悪夢だけど、今回は違った。
『お兄ちゃんの背中暖かいね』
『そうかい…全くリンファは本当に元気だよね……疲れて歩けなくなるまで遊ぶなんて』
『遊ぶのは、子供のとっけんなんでしょ？』
『うん……その通りだよ。だから今は目一杯遊んでもいい。でも、リンファ。君も大人になるんだよ』
『遊べなくなるなら、あたし……子供のままがいいなぁ…』
『僕も昔は、そう思ってた。でもねリンファ……やっぱり僕達は大人になるんだ。別れ道って悲しいかい？リンファ』
『お友達と別れちゃう道のこと？うん……ちょっと悲しい…』
『だよね……僕達は何度もそんな別れ道にあうんだよ』
『よく……わかんない』
『でも、…これだけは忘れないで欲しい……別れの後には新しい出会いがあるから…その出会いをリンファは大切に……』
兄の姿が掻き消えていく。夢は覚めるもの。幼き頃の夢。幸せだった夢。兄の言葉を思い出す。兄は何が言いたかったのか……リンファには未だにわからない。

「ん……？」
「おっと目が覚めたかい？」
リンファは目を覚ますと、夢の中と同様に誰に背負われているようだ。完全に寝ぼけているリンファは、
「……ふにゅ……おにいひゃん？」

普段の彼女を知っているなら、すぐさま自分の耳に異常が無いか医者に走りに行っただろう。
「……はい？」
甘えたようなリンファの声に心底驚くグレン。そんな声がリンファにあげられたのかとグレンは思う。
リンファは、寝ぼけているようだ。あの死闘でリンファの魔力は現在底をついているのだ。肉体面に置いてもかなり疲弊している。覚醒が遅れるのは当然と言えば当然だ。
「あの～リンファさん？起きてる？」
何故か敬語になるグレン。
「はふぅ……おにぃひゃん…すきぃ～」
ぎゅ～～。
「……」
ぐぁっ！
これは、マズイ……ウィークポイント直撃だ。流石魔弾の射手！こちらの弱点なんてお見通しか！か、可愛い過ぎる！
何が良いかってそのギャップが反則だ。堪えろ！耐えろ理性。
「んにゅ～～」
ぎゅ～～。
いや！寧ろ絶えろ！我が理性！こうなったらもうリンファを抱きしめるしか！
とか何とかグレンが憲兵隊に捕縛されそうな事を思っていると……
「……ん？」
「……あ」
リンファが覚醒した。
「あ……あれ…アタシ…って何でアンタがアタシをおぶってるのよ！」
「……」
「ん？何よ……その残念そうな顔は？」
「何でもない何でもない……はぁ（深い溜息）……ん～単純にリン

ファの魔力が底ついて倒れちゃって、俺が背負って歩いてるわけ」
「お、降ろしなさいよ！一人で歩けるわ！」
「たぶん、無理しない方がいいぜ。また倒れたら元も子もないだろ。それに、女の子一人くらいなら余裕だって」
「――――っ！」
再び、黙り込むリンファ。そして真っ赤になりながら、
「あ、あの、そのえっと…」
「ん？どうしたリンファ」
「その……あ、ありがと」
小さく、消え入りそうな声だったけどグレンの耳にしっかりと届いた。
グレンは茶化さず、
「どういたしまして」
そう言った。

「うおお――無事に帰ってきやがったぜぇ！！」
「すげぇぜ！お前ら！本当に倒しちまうなんて！」
「格好良すぎんぜ！！惚れた！！」
帰ってくる頃には既に夕方だった。
酒場に戻ると、そんな歓声を浴びた。
「おい！お前らうるせぇぞ！」
レイグの一喝で、一応は静かになった。
「ほら……報酬だ」
袋を投げ渡す。ずっしりと重い
「ちょっと……これ多過ぎない？いくらなんでも払い過ぎじゃあ……」
中身を見てみるとリンファから見た目でもかなりの大金だった。
「はっ。自覚ねぇようだから言っとくが……お前らこの街を救ったんだぜ？寧ろ少ないぐらいだ」
「でも……」

「うだうだ言わず黙って受け取れ」
まだ少し、迷っているリンファ。そこで、
「それじゃ……この金で皆で飲もうか？街の人も誘ってさ」
「おお！ナイス提案！俺声かけてくるわ！」
「俺も！」
「いいのかよ……お前ら」
レイグが呆れたように言う。
「その方が楽しそうだしな。なぁリンファ」
「ま、たまにはいいかな。そういうのも」
こうして、この日街全体で祭のような騒ぎが行われた。
騒がしいのが嫌いなリンファもこの日は心地よさを感じた。

「やっぱり、行くのか？」
「うん。ここは、居心地が良すぎるから……」
深夜。リンファはこの街を出ようとしていた。このまま居るとこの街が好きになってしまいそうで……それが恐かった。
「お前は本当に難儀な性格しているな。……本当に似てるよお前ら」
「アタシとグレンが？」
「ああ。今でこそああだが……酷かったぞ？」
レイグの頭に映像が浮かぶ。

冷たく降りしきる雨。
「くっ」
その傷だらけの少年は剣先をレイグの首元に突きつけ静止した。
「……」
あと一歩少年が剣を動かせばレイグは間違いなく死ぬ。にも拘わらずレイグは視線おろか眉一つ動かさない。
どしゃりと。少年は泥に沈む。
「死んだか？」

何の感情も込められていないレイグの質問。
「何て……」
その質問には答えず、グレンは言葉を紡ぐ。
「なんて目してやがるんだ……アンタは！それじゃ死人だ。
俺に死人は斬れない」
「……」
言い得て妙だとレイグは思った。それでも、
「お前よりはマシだ。お前は生きているのに死に急ごうとしている。
お前はいつでも死にそうな人間だ」
「死にたい訳じゃない。負けたくないだけだ」
「なに……？」
「俺は……誰よりも、強く……ただそれだけだ」
そう言って少年は動かなくなった。
見捨てる事は簡単だった。
だがレイグは彼を助ける事にした。崩れそうな人間を放って置けなかった。
それがあのグレンとの出会い。

「数日後に俺の前から奴は姿を消した。そして、6年前戻ってきた時にはああなってやがった。何があったなんかは知らん」
「……」
「アイツが変わって、俺自身変わった気がする。多分良い方にな。
人は変われるぞリンファ・スカーレット」
それはとても甘い誘惑だった。
だが自分は誓った。
「……それでも、アタシは……やるべき事があるから」
そうリンファにどうしても倒さなければならないモノが居る。
町を壊し、人を殺戮した悪魔――あの赤い紅い竜を。
決意を聞いたレイグは少し、間を置いて、

「目的を果たしたとき、もしくは果すのが辛くなった時、ここに戻ってこい……俺達はいつでも歓迎する」
そう言って、レイグは微笑んだ。いつもの無愛想からは信じられない程の優しい微笑みだった。
「うん……考えとく…」
そう言ってリンファは酒場に背を向ける
「ああ……グレンによろしくな……」
さようならはなかった。

「やぁ……遅かったじゃないか」
「グレン……本当にいいの？お別れ言わなくて……」
「いいさ……俺も元々旅人だ。単純に滞在した時間が長かっただけだ…」
それに、と続けるグレン。
「俺とレイグに湿っぽいのは似合わないさ」
深く聞けそうに無かった。それくらい彼らの絆は強いのだろう。
「それもそうね」
家族を失ってから、出会い初めて心地よく思えた人々。
『別れの後には出会いがある』
そんな兄の言葉。
今なら、少しだけ分かるような気がした。
「さて……行こうか？リンファ」
「ふん……せいぜいアタシの足を引っ張らないでよ？グレン」
こうして始める二人の旅。お互いの目的も語らぬ二人。
一人は復讐者「魔弾の復讐者」一人は最強を目指した「成れの果て」
目指すは朱き理想郷。
赤く、朱いそして緋色の伝説は幕を開ける。

第五話「別れ道」（後書き）

初めてまして。帆立レノンです。ここをお読みになっているという事は、わざわざこんな若輩ものの拙い文章をここまで読んで下さったという事ですよね。……ですよね？
ともかくありがとうございました。緋色のレジェンディアとりあえずこの話で一段落です。大変おごかましいですか…本で言うと一冊終了ってところです。少しでも楽しんで貰えたら光栄です。あ。もちろんまだまだ続けますよ。短編もちらちら書こうかなと思ってます。感想・ご意見もどしどしお願いします。批判でもけっこうです！寧ろ厳しく！
この小説とも呼んでもいいのかとわからない代物を読んで下さいまして本当に最大限の感謝を！！

修正に伴いあとがきも追加させていただきます。
ようやくここまで修正が終わりました。内容が少し（かなり？）変更されています。本当に最初からやれや！と言う方……本当に申し訳ありません。自分勝手な作者で反省しております。
しかし前より良い出来だと思います！
ここまで読んでくださった皆様本当にありがとです！

第六話「魔女の番人」

第六話「魔女の番人」

ルームウァント。ウォルケの北西に位置し、アルデ大陸では中央部に値する為、活気づいた街である。そんな街をリンファとグレンは歩いていた。いや、正確に称するなら、

「……いい加減、ついてくんな！」

「何だよ、連れないなぁ～俺とリンファの仲じゃない。そんな邪険にしなくても」

「アンタがアタシのお尻触ったからでしょうが！！」

「形は良いモンだがらつい～いいじゃないか減るモンじゃないんだし☆」

「いい歳した男が☆何て使うなボケっ！」

ボケと言う言葉も年頃の女の子が使う言葉では無いだろう。

そんな感じで、リンファにグレンが付き纏っている感じだ。端から見れば、カップルの痴話喧嘩なのだがリンファは気付かない。

「全く……アタシは酒場に情報収集に言ってくるから、アンタは宿の手配頼むわよ」

「任せろ！部屋は勿論同じで……」

「んな訳ないでしょ！ふざけてないでとっとと行きなさい！」

グレンの軽口を蹴り飛ばし、さっさと酒場に向かう。

「……やれやれ、俺は１００％と本気なんだけどな……」

そう呟き、グレンもまた歩き出した。

リンファは酒場の扉を潜りながら店内に入る。酒場は昼間から賑わっている。同業者や、旅人や傭兵。ギルド兼の酒場は情報収集の

場でも有る。酒場は昼夜問わずに賑わう。
嫌な視線や、下品な野次を無視しカウンターの店主に話し掛ける。
「店主……Cクラス以上の機械獣討伐の依頼は有る？」
少しだけ怪訝な顔をするが、
「いや。機械獣に関する依頼は来ていないな」
酒場の店主として仕事内容を話す。少女の身を案じるような忠告は無い。元よりレイグのようなお人よしは少ない。なるべくなら、店主は依頼主とは深く関わらないのだ。
「……そう。それじゃミルク頂戴」
実はリンファは酒類は苦手なのである。
「……」
んなガキが酒場来てんじゃねぇよと言いたいのを堪え、店主はリンファのオーダーに従う。
「ありがと」
素直に礼を言った自分にリンファは驚く。
（アイツに感化されてるのかしら）
小憎らしいグレンの顔が浮かび、持っていたグラスを砕きそうになる。
（ムカつく……何がムカつくって……アタシがいつの間にかアイツを認めているって事だ）
余分な感情は捨てた筈なのに。
アイツと居ると失ったモノを取り戻せると。
ちくりと……僅かに胸を刺す痛み。
（くだらない）
自分の感情を切り捨てる。
（今は、情報収集をしなきゃ）
頭を切り替える。周りの喧噪から情報だけを取得する。
殆どがくだらないモノだが、一つ気になる話題が耳に入る。
「なぁ、知ってるか？ここから東のユート坑道」
「ああ。数年前に廃坑になった所だよな？そこがどうしたんだ？」

「いや……聞いた話だと、とんでもないモノが眠っているんだと」
「んだよ。ソレすっげぇ胡散臭せぇ。美女でも眠ってんのか！」
「ははははっ。確かにソレはすげぇ！」
（何だ……噂話か）
しかも人づて……信憑性は限りなく低い。
くだらない話を聞いてしまったと意識を他に向けようとした時、
「その坑道には行くな」
第三者の声を聞き再び意識をそちらに向ける。若く少年のような声だった。
気になり目を向けて見ると、ぼろ布のような服を着た少年が居た。端正な顔立ちだが、まだ幼さの残る。美少年の域に入るだろう。皮肉気な表情をしていてるつもりなのだろうが、どちらからというと、生意気そうな印象を受ける。
「んだぁガキ……行った事でもあんのかよ？」
大人げなく、少年に絡む傭兵二人。盛り上がっていた所に水を注されれば確かに不快だろうが。
「ああ……恐ろしい化け物が居た。オレでも敵わない。つまり貴様等のような三流以下では瞬殺されるのが関の山だ」
明らかな侮蔑の言葉。
「んだとぉ！このガキィ！！」
「余程、痛い目に遭いてぇらしいな！」
腕のみで生き抜いて来た傭兵達にとって、弱そうな少年の侮蔑は効果的であったようで一気に沸騰する二人組。
まぁ……相手を選べ無い時点でたいした器ではないが。
「舐めやがって！」
傭兵の一人が剣を抜く。視線が集まる。だが止めようとする者はリンファも含めて居ない。　酒場故に荒事は決して少なくなく、日常茶飯事と言っても過言では無い。
「店壊さんでくれよ……」
店主の切実な願いは聞きいられそうも無かった。

一方の少年は、剣を向けられても平然と余裕の表情を浮かべていた。
「……ふん」
「くだばれぇ！」
怒号と共に振り下ろされる剣。
「……！？」
少年の顔面を両断する筈の剣は、テーブルを破壊した。
「ぎゃ――！？」
いつの間にか背後に周り込んでいた少年は、傭兵に足払いを繰り出した。
倒れる男の腹に踵を振り下ろす。
「――ぶ、ほ！！」
全身の空気を吐き出した音が漏れる。言葉無く悶絶する男。
「や、やろ――！？」
剣を抜く暇も無く、少年の回し蹴りで倒れ伏した。
白目を向き倒れる。
「……へぇ」
感心したような声を上げるリンファ。人とは思えない獣のような動きだった。
「……この二人と同じ目に遇いたくなくばあの坑道には近寄らぬ事だな」
そう言い捨て少年は酒場を去って行った。
「……」
その少年の事が妙に頭に残った。

酒場を出て中央区を目指していると、可愛い女の子と何か話している馬鹿……つまりグレンを発見した。
聞き耳を立てるに、その内容はナンパのソレだった。
「……ふぅ」

深呼吸を一つ。ここでリンファが怒り狂いグレンを殴り飛ばそうと思った方も多いだろうが違う。
リンファは大人なのだ。大人は大人の対応をする。とっても冷静に、
「……」
腰の大型拳銃クレトを引き抜き、明確に狙いを付ける。
狙うはグレンの後頭部。
「……」
街中で何の容赦も無く、ぶっ放した。

「……いやいや。アレはちょっとヤバイって！」
銃声と悲鳴を聞いて憲兵隊が駆け付け、現場は騒然とし二人は全力で逃げたのだった。
「何で素直に当たんないのよ！お陰で大騒ぎになったじゃない！」
「いや……当たってたら俺の頭な無くなってたからね」
きっと今以上の大騒ぎとなっていたのは確実だ。
「サイレンサーを付けて無かったのが敗因ね」
「ナンパ如きで殺されたら堪らないんだけどなぁ～」
「アンタが止めれば良いんでしょうが！」
「……俺のやる事には興味ないんじゃ無かったっけ？」
「うっ。それは……その……」
そもそもリンファは、何故あんなに頭に来たのか分からない。感情が抑えられなかったというか……
「成る程！」
ぽんっと。手を付くグレン。
「な、何よ？」
「つまりリンファは、俺にヤキモチを焼いてるんだな！」
「なっ～～～！？」
耳まで真っ赤になるリンファ。

「ち、違っ！そんなんじゃ――！」
「やっぱり可愛い所あるよなぁリンファは」
「ち……違うっつてんだろぅがぁぁー」
顔を真っ赤にしたリンファの必殺の回し蹴りがグレンのこめかみを綺麗に捉えていた。

「……」
怒り心頭と言った様子のリンファと顔を腫らしたグレンは、宿屋に居た。
その尋常では無い様子の二人に受け付けの女性は怪訝な顔をするが、そこはプロ、笑顔で応対する。予約はしっかりこなされていたようで、部屋の番号が付いた鍵を渡される。
「ちょっと待って……何で鍵が一つしか無いのよ！」
殺意の篭った眼光に、軽口を叩けば殺られると本能で悟り、グレンは慌てて弁明をする。
「ち、違う！本当に一部屋しか開いて無かったんだ」
本当でしょうね！？と言う視線の矛先が受付嬢に向かう。
「ひっ……は、はい……そうです。そのお客様がご予約された時にはほぼ満室でして……一部屋しか……その……」
人を射殺せそうな視線を受けながらも必死に説明する受付嬢。この場に置いては一番不幸である。
「リンファ……怯えてるって……」
「あ……」
びくびくと小動物のように震える受付嬢を見て流石に冷静に戻るリンファ。
「……はぁ。仕方ないわね……とっとと行くわよ」
すたすた歩き出すリンファ。
「やれやれ……悪いね」
まだ震えていた受付嬢に謝り、グレンもリンファを追う。
「……こ、恐かった……」

恐怖を逃れ安堵した受付嬢は、本音を呟いた。

「……ふぅん。割りと良い部屋ね」
「……確かに」
「さて……」
リンファは備え付けの椅子に腰掛ける。
「これからだけど、とりあえず酒場で気になる情報があったからそれから話すわね」
酒場で取得した情報と出来事をグレンに話す。
「……まぁ、その二人の噂だけじゃ信じなかったけど……」
あの少年の口ぶりからすると、何か隠されているのは明白だ。
「そうだな……何か有るのは確かだね……」
「行くだけ時間の無駄かも知れないけどね……アタシそこまで興味ないけど……」
と言いつつ、リンファは行きたそうな顔していた
ふむと顎に手を当て、何か考えるグレン。
「明日、行ってみる？」
グレンのそんな提案。ぴくりと眉を動かすリンファ。
「……何でよ」
「いや、リンファが行ってみたそうだったから」
グレンは素直に思った事を口にする。
「……ハァ？何言ってるのよ！アタシは別に……」
「ならいいけどな」
「！……急に意見を変えないでよ！」
「……行きたいの？」
「……アタシはどっちでもいいって言ってるでしょ！」
（……全く……ひねくれているというか、素直じゃないと言うべきか）
「分かったよ。俺がどうしても行きたいからついて来てくれるか？」

押して駄目なら引いて見ろ。アプローチの方向を変えてみるグレン。
「し、仕方ないわね。どうしてもって言うなら行ってあげていいわよ」
「よし。じゃあ明日はユート坑道で宝探しだ！」
「おー！」
意外にノリノリのリンファだった。

「シャワー浴びてくるから……ノゾイタラコロス」
「わ、分かってるって……ちっ……見抜かれてたか」
「……」
「覗かないって！」
その後数分の問答後、ようやく納得したのかバスルームに姿を消すリンファ。
「……やれやれ」
ユート坑道。
正体不明の怪物。
ソイツはどれだけ強いのか。
躯が疼くのを止められない。
「昔の癖がまだ抜けないか……」
リンファに偉そうな事言えないなと彼には珍しい憂い顔で呟いた。
「アンタ……次入る？」
宿屋の貸し青の寝間着を着ながらバスルームから出たリンファはグレンに質問した。
「……色気ない寝間着だな……もっと着物類はもっと色っぽくないと」
いつもの軽口を叩くグレンの表情はいつも通りだった。
「何の話をしてんのよアンタはぁー！？」
そんなリンファの叫びが宿屋に響いた。

第七話「イグナイター」

第七話「イグナイター」

ユート坑道。

昔は、稀鉱石が採掘され賑わっていた。今は見る影も無く、ボロボロで今にも崩れそうだ。

だが、僅かでも魔力を感じる者が居るすれば、瞬時に理解しただろう。奥に行く程魔力が濃くなっていく事に。

その最深部に少年は居た。

「……我が主……」

ぼろ布を纏った少年は呟く。

自らの主を前に彼はひざまづいた。

巨大な氷の前に。

その中には美女が居た。見た者は確実に心を奪われるだろう。

美しさを凝縮したような顔立ち、森を思わせる深緑の髪。体格も女性として完成している。

しかし、美しさよりも目に入るモノがある。長く尖った耳……　そうまるで魔女のような……

「必ずお救いします……故にそれまでどのような障害もこの手で守り抜きます」

そう彼は何度も誓った言葉を口にする。

その誓いは数百年以上も果たされていない。

（オレは諦めない。あの日貴方に助けられた日からずっと）

暫く、氷の中の彼女を惜しむように見ていたが決意したように身を翻した。

「とにかくユート坑道に向かう前に物資補給よ」
という事でリンファとグレンの二人は町で物資を補給する事にした。
「……携帯食はまだ十分かな」
荷物を整理しながらグレンはそう言った。
「アタシは弾薬の補充が必要ね。着いてきなさい」
護身用の為一般的に銃等の武器は許可されている。その為専門店も少なくない。だが、町の外で機械獣に出会えば蟷螂の斧に過ぎない訳だが。
「……この店良いわね」
『ＳｈｏｔＧＡＲＤ』と書かれた看板を提げた店を見つける。
「……古い店だな」
先に入ったリンファを追いかけグレンも店に入る。
「いらっしゃい」
歳老いた店主の声。内装も結構古ぼけている。
様々な棚の中には銃を使う者にしか分からない部品が並んでいた。
「えっとクレトって言うリボルバーの弾薬有る？　製造ナンバーは０１５何だけど……ああ口径と型は――」
「ほぉ。未だアレを使っている者がおるとはな……しかもお嬢さんが……ちょっと待ってなさい」
そう言って店主は奥に消えていった。
「……やっぱ使っている人少ないんだ」
リンファはクレトを腰から抜き少し淋しそうに眺める。
「……俺は銃詳しく無いけどそれは知ってるよ。小型の大砲の異名を持つセイン社の８２型のクレト。大の大人でも扱うのが難しいって代物だ。今じゃセイン社自体が廃れてしまってもう骨董品の域って言われてる」
「……」
ぽつりと呟くようにリンファは言った。
「元々銃って対機械獣用に造られたのよ。魔装具の使えない普通の

人間が対抗する為にね。特にこの銃はそれに特化してる」
「……」
「でも、機械獣には歯が立たなくて……いつの間にか人同士が争うのに使われていくようになった。
皮肉よね。人を守る為の武器なのに、人を傷つける武器になるなんて」
「……リンファ」
「だからアタシは本来の使い方をする。機械獣を撃つ為だけに使いたいの。その方この子も喜ぶ気がするしね」
そう言いリンファは僅かに微笑んだ。
その笑顔を見てグレンの頭にある人物の顔が頭に浮かんだ。
「『剣は人を護る為にある』か……」
グレンは彼にしては珍しい憂い顔をしながら呟いた。
「……何それ？」
「いや……昔どっかの馬鹿が言ってた言葉だよ。リンファの話しで思い出した」
「アンタが馬鹿って言うくらいなら、相当な馬鹿だったみたいね」
「俺はそこまで馬鹿かい……まぁ、本当に馬鹿な人だったよ。お人よしが服着て歩いている人だった」
その呟きには憧憬に似た響きが含まれていた。
「……ねぇ、その人…」
「死んだよ。俺が殺した」
即答、だった。
平淡な、感情の篭っていない声。
人をぞくりとさせるような冷たい声だ。
「……」
どうしてとリンファは聞けなかった。
聞いてはいけない彼の闇を垣間見た気がしたからだ。
「ふむ……」
先程と違い、悪戯っ子のような笑顔を浮かべるグレン。

「？　な、何よ？」
「いや、しおらしいリンファ何て滅多に見れないからね」
「なっ！？　こんな時に、ふざけないでよ！」
「はははっ」
そう言って再び笑うグレン。
（俺がこうして笑っていられるのも、アンタのお陰なんだぜ、師匠）
遠い日を、もう戻らない日を思い出しながら彼はそう思った。
「最近の若者は仲が良いのぉ～」
奥から店主が荷物を持って戻ってきた。
「そうなんだよ。俺達ラブラブなんだぜ」
「殺すわよ」
「さて……お嬢さん、その銃ワシに見せてくれんか？」
「え、いいけど……」
リンファは店主に銃を手渡す。それをマジマジと見る店主。
「ほぉ……使い込んでおるなぁ……それに、手入れも行き届いておる」
「……」
リンファにとってそれは当たり前の事だから特に何も言わない。
「……ホレ」
店主に銃を手渡されるリンファ。
「銃は力。使い手しだい。お嬢さんはよく分かっておる」
「……」
「ほれ」
そう言って店主は何かの部品――カードリッジのようなモノ――をリンファに手渡す。
「何……コレ？」
「発火装置（イグナイター）。お嬢さんの魔装具……ジークフリードに取り付けるといい」
「え？」
自らの魔装具を看破され驚くリンファ。

「万にも及ぶ魔装具を見て来た。展開前でもそれがどんなタイプか解る」
「……」
「力に溺れるで無いぞ」

「どう思う？」
店を出て、リンファはグレンに問い掛ける。
「どうって？」
「さっきの奴よ。発火装置（イグナイター）だっけ？」
「付けてみたら？」
「気軽に言わないでよ……まぁ……ちょっとやって見ようかな。起動……ジークフリード」
慣れ親しんだニ丁拳銃モード。
「……この窪みに取り付けるのね？」
本来マガジンを取り替える場所に何か差し込むような窪みがあった。
先程貰ったカードリッジを差し込む。
すると、
「！！」
青白く光り、紋様が現れる。
「おお！　綺麗だな」
「……」
「……んで、効果は？」
「ん～。出力も変わって無い気がするけど……やっぱり胡散臭いと思った」
「撃って見たら？」
「馬鹿言わないでよ。街中よ？」
「さっきぶっ放してだろ？」
「うっさい！」

注げる魔力もあまり変わっていない。もう無駄かと元に戻そうとした直後――

ガシャン！　と硝子の割れる音と共に右側の店から厳つい男達が飛び出して来た。

銃を持った二人組のようだ。どうやら男達は強盗のようで逃げようとした直後だった。

「邪魔だ！　どけ！」

「うるさい」

とくに何の躊躇いも無くリンファはジークフリードを二連射。放たれ魔力の弾丸は二人組の銃を精確に破壊した。

「な！？」

「う、うわぁ！」

唯一の武器を破壊されて慌てて背を向けて逃げ出す二人組。

「全くとんだジジィね……思わせぶりな事言っちゃって」

「何事も無かったようにスルーするんだ。捕まえなくていいのかい？」

「そんな義理何処にあんのよ？」

「店主から金一封出るかも……」

「そうね。たまには人助けもいいわね」

もう既に犯人達の姿は見えなかったが……

「足を吹き飛ばそうかしら……」

「金一封所じゃなくなるからね」

「仕方ないわね。手加減はするわよ」

リンファの超視力は軽々二人組の姿を捉えていた。

（足狙い……出力は下げて、絞って放つ）

トリガーを引こうとした瞬間――

（え……停止弾（フリィズ・ショット）？）

頭に浮かんだそんな言葉。その意味を考える前に銃弾は発射された。

「はぁはぁ……クソッ何だったんだあの女」
「はっ……だがここまで逃げりゃ……」
「はは……これで俺達大金持ちだぜ」
強盗を成功させ逃げる事にも成功した二人組はようやく安堵した。とても愚かしい事に。
「いてっ」
足に軽い衝撃。石でもぶつかったか？　そう思い足に視線を向けると、
「え……ぎゃあ！　何だコレ！」
衝撃を感じた脛辺りが凍り付き始めたのだ。
「何だぁ？　そりゃ？」
「お、お前も！」
「ぎゃあ！　足が凍ってるぅ！！」
「動けねぇ！！」

「……」
そんな二人を呆然と見るリンファ。撃った自分が驚いていた。
「リンファ……今の弾……何だ？」
「……」
リンファは答えられなかった。弾の性質が追加された？　呆然とそんな事を考えるしか無かった。

第八話「疾風の魔剣士」

第八話「疾風の魔剣士」

あの後その場から逃げるように立ち去った二人は町の外に居た。この辺りは荒野というより砂漠のようになっている。

リンファは再びジークフリードを展開する。

「……やっぱり撃てる弾の種類が追加されてる」

「じゃあさっき弾も？」

「ええ。停止弾（フリィズ）ね。相手を凍らせる弾丸みたい。他にも焔弾（フレイム）、麻痺弾（サンダ）、あと拡散（ワイド）機能も追加されてる……出力が変わって無いから気付かなかったわ」

「へぇ……それかなりの戦力アップじゃないか」

「……別にひとえにそうとは言えないのよね」

「ん？　何で？」

「普通の弾丸は魔力をそのままエネルギーとして撃ち出してるの。威力の調整や形状を変えるだけで済むんだけど……属性弾は変換を挟むのよ。魔力→炎変換→形状設定→範囲設定→発射。と面倒なのよ。考えず撃つとさっきみたいになるのよね」

「まぁ……確かに大騒ぎになったしね」

強盗二人の下半身を凍らせてしまった為かなりの騒ぎとなった。

本来ギルドに登録している『機械狩り（メタルハンター）』は一般人に向けて魔装具を向けてはならないと言う決まりがある。自衛以外は認められていない。先程のアレは確実に自衛の域を越えていた。法律違犯で下手すれば免許剥奪も有り得る。

力持つモノへの自制なのだ。

「暫く戻らない方がいいよな」

「まぁ……そうね」

騒ぎを起こした本人はさほど気にしていないようだが……
「というか人には銃向けないんじゃないの？　容赦無く撃ってたよな？」
「悪人は人間じゃないわ」
真顔で言い放つリンファ。
「そこまで言いますか……」
グレンは思わず呆れ顔を浮かべる。
「ま。何にせよ実戦で使うには調整が必要ね」
「……成る程。銃は色々面倒なんだな」
「……」
「どした？」
急に立ち止まるリンファ。グレンは怪訝な顔を浮かべ問い掛ける。
「誰か、襲われてる」
リンファの優れた視力は数キロ先の映像を映していた。
「……何処？　見えないけど……」
「ああ……視えないか。行くわよ」
そう言うと二人は疾風のように駆け出した。

「あそこか……」
二人が眼下に捉えたのは不細工な鬼のような機械獣……メタルオークに囲まれる一人の少年。メタルオークはEクラスの機械獣だ。
個々はさほど強くは無いが、やはり数の暴力は強い。
（……あの子、酒場に居た……）
昨日酒場で荒くれ者を一瞬でのした少年だった。
「どうする？　助けとく」
「要らないでしょ。多分強いし」
リンファは観戦を決め込む事にした。

グオオー！！
メタルオークの一体が雄叫びをあげ少年に襲い掛かる。振り下ろされる強靭な腕。その威力は少年の頭を砕くには十二分。
「ふん……」
しかしその腕が少年を捉える事は無かった。
グァ？
メタルオークの腕が宙を舞っていたからだ。いつの間にか握らていた細剣がオークの腕を切断していたのだ。反す腕でオークの首を両断。疑問付を浮かべたまま宙を舞う生首。
「死ね……マテリアバイスが」
そんな言葉を呟いた直後暴風が舞った。

「……すご」
その後の展開は少年の独壇場だった。疾風の如く剣技で全てのオークを一体ずつ両断していく。見た所あの剣は魔装具では無い。つまり少年は生身であれほどの強さだ。
カタは一瞬にしてついた。少年を囲むのはバラバラとなったオーク達だった。
「アンタとどっちが……」
強いかと興味本位で聞こうと振り向くと、
「……グレン？」
そこには誰も居なかった。

「――っ！？」
「はぁ！！」
降って来た闘気に即座に反応する少年。
上から降り注ぐ両の剣を受け止める少年。その相手は笑みを浮かべたグレンだった。
「……」
「へぇ。やるじゃん！」
即座に斬り掛かるグレン。少年は右方から来る剣を受け左方から来る剣を躱す。
少年とグレンの剣が交差する。金属の奏でる硬質な音が辺りに響く。均衡する剣劇。手数の多いのは二本の剣を持つグレンではなく少年の方だった。
（迅い……！）
風のように迅い剣技だ。全て躱しきれず浅い傷も増えていく。
（くっ）
深く肩を刈られ一瞬反応が遅れる。その隙を少年が見逃す筈が無い。少年の右足がグレンの側頭部に襲い掛かる。
「ぐっ！」
剣で受け止めるグレン。しかし衝撃を殺し切れない。
数メートル後ろに飛ばされる。追撃は来ない。
「ちょっと何やってんのよ！」
ようやくリンファが駆けつけて来る。
「いきなり切り掛かるなんて何考えてんのよ！」
「ユート坑道の番人……彼の事だよ。ね？」
グレンは少年にウインクする。それに対して少年は無言。それが肯定を現している。
（この子がユート坑道を護っている？　一体なんの他に……？）
「……酒場に居た女か。警告した筈だ」
ようやく少年が口を広く。
「そして貴様何者だ？」

その鋭い視線はグレンへと向く。
「キミこそ……その剣技。人間技じゃない。ユート坑道に行きたいんだけどね。どうせ通さないつもりだったんだろ？」
「……ああ。人間は通さない」
そこには確固たる意思と迫力があった。
「二対一で何言ってんのよ？」
その気迫に負けじとリンファも魔装具ジークフリードを展開しようとするが、
「いや」
グレンはそれを引き留めた。
「サシで勝負だ。リンファは手を出さないで」
「な、何訳の分からない事言ってるのよ！？」
「いいから。こんな強敵……久しぶりなんでね……ここは俺に任せてくれ」
「……」
グレンの真剣な眼差しに渋々ながらもリンファは下がった。
そんな様子のグレンは見た事もなかったからだ。
「負けたら承知しないわよ」
「心配してくれるんだ？」
「ち、違うわよ！？　ア、アンタが死んだらアタシの荷物誰が持つのよ！　別にアンタが心配な訳じゃ……」
あたふたとしたリンファにグレンは笑みを浮かべて少年に向き合う。
「俺はグレン。キミは？」
「……アス。ここから先は通さん」
お互い動かない。膠着状態が暫く続く。
「……はっ！」
先手を撃ったのアスと名乗った少年だった。
ひゅん！
風を斬る剣。剣筋が音速を超えた事による幾重もの衝撃波（ソニックブーム）がグレ

ンを襲う。
「炎舞……円燕！」
グレンを中心に円状に広がる炎が風を焼き尽くす。
「余計な技は無用！　単なる切り合いで決めようぜ！」
「……」
グレンは双剣を交差するように構え、アスに向かい駆ける。
「は！」
短い気合いと共に交差した刃を水平に薙ぎ払う。構えまで僅か一秒。リンファの動態視力でさえ捉えられない程疾い剣。しかしアスはそれを僅かな動きで躱す。
反撃の刃がグレンを襲う。致命傷となるモノだけを躱し、その他はあえて受ける。
（コイツの動きは素人だ）
相手の動きを冷静に読みながらグレンはそう確信する。最初に剣を交えた時から分かっといた。アスの剣技は酷く粗い。素人そのものだ。
だが。単純に。
（疾い。ひたすらにただ疾い）
そうそれだけだ。細剣をとんでもないレベルの疾さで振るう。一撃一撃は威力は無いがそれが百にも千にもなれば話しは別。いずれ死に至る。それがアスの剣技の正体だ。
（長期戦は分が悪い……なら）
ざくりと。深々とアスの剣がグレンの腹部を切り裂いた。
「っ！？」
驚きは二つ。一つはリンファ。もう一つは。
「なっ！？」
切り裂いたアスの方だった。深く斬る程次の一手はどうしても隙が生まれる。
グレンはにやりと笑い、アスは己の失策に気付く。
僅か一瞬でもグレンにとっては十二分。

「だぁ！！」
気合いと共に放たれ一閃がアスの剣を捉えた。
ぎぃん！！
そんな音を立て剣は吹き飛び地面に刺さった。
「バ……カな……」
「勝負有りだな」
呆然としたアスに剣を突き付ける。重傷を負った事など微塵も感じさせ無い程グレンは笑みを浮かべていた。その笑顔は喧嘩で勝ったがき大将のような無邪気なものだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6935l/

緋色のレジェンディア

2011年3月9日13時41分発行